

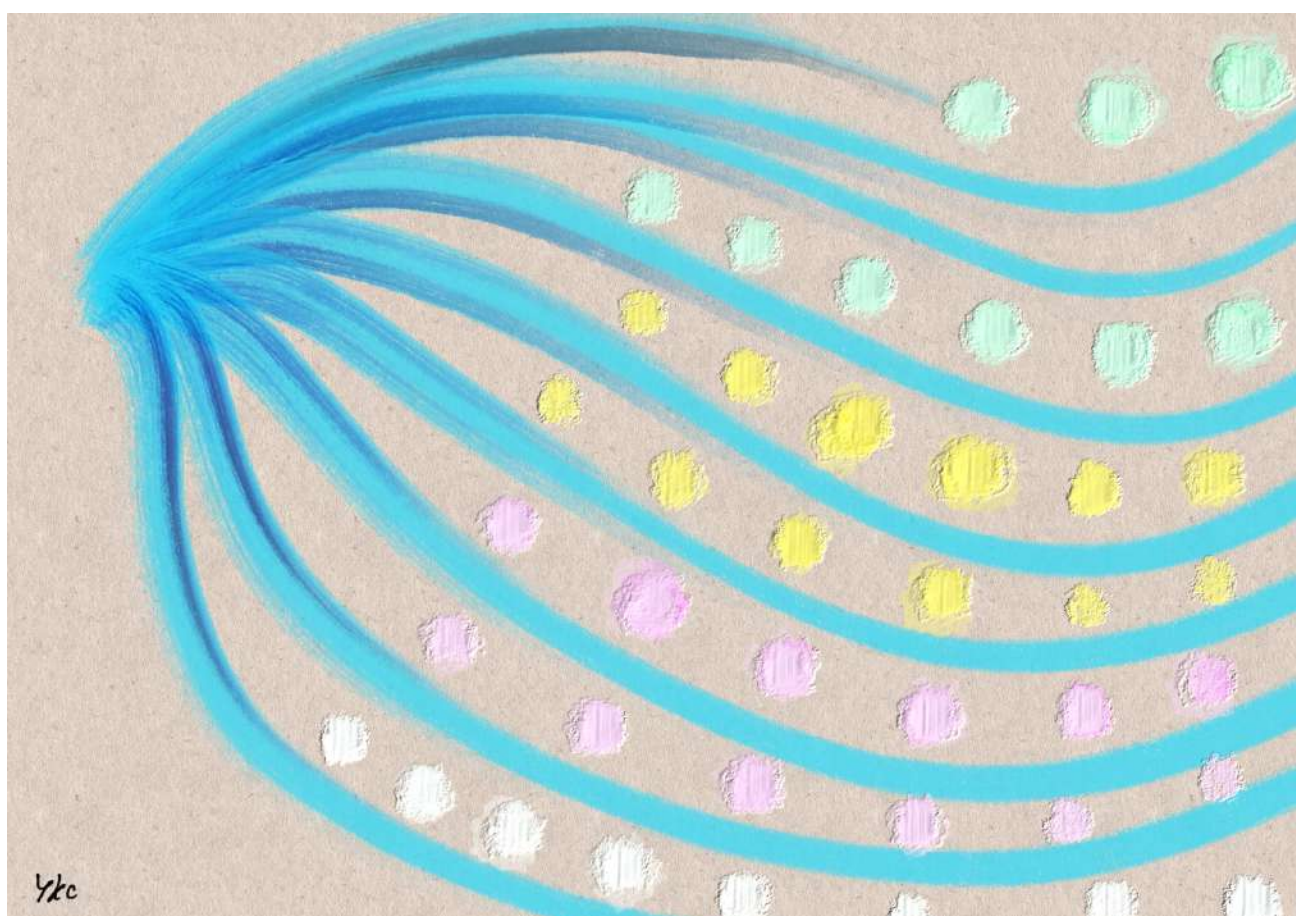
---

# 発達理論の学び舎

Back Number: Vol 302

Website: 「[発達理論の学び舎](#)」

---



No.961 空の思い出\_A Recollection of the Sky

---

## 目次

- 6021. アテネでの古書店巡りに思いを馳せて
- 6022. 今朝方の夢
- 6023. 涼しげな土曜日の午後
- 6024. ボディ・マインド・ソウル・スピットのホロン構造:「ソウルメイト」と「スピリットメイト」
- 6025. アテネ旅行に向けた食事調整
- 6026. 多様性の尊重や「べき論」と規範性
- 6027. 物質消費的対象ではない創作活動と読書に向けて:今朝方の夢
- 6028. 死と霊性:集合のシャドーワークの大切さ
- 6029. 美と善に関するミームの創出と伝承:「発達倫理」の大切さ
- 6030. 今朝方の夢
- 6031. メタファーを活用すること
- 6032. 発達を取り巻くメタファーを変容させること:学ぶことを愛する気持ちを育むこと
- 6033. 外国を舞台にした今朝方の夢
- 6034. アテネ旅行に向けて:今朝方の夢の続き
- 6035. 言語阿頼耶識と創造性について
- 6036. 今朝方の夢
- 6037. 人間中心的な発想の誤謬:生命尊重の精神に根付いた時空間倫理
- 6038. 【アテネ旅行記】アテネ旅行の出発の朝に:今朝方の夢
- 6039. 【アテネ旅行記】スキポール空港に向かう列車の中で
- 6040. 【アテネ旅行記】スキポール空港の様子

---

## 6021. アテネでの古書店巡りに思いを馳せて

時刻は午前5時半を迎えた。今朝は5時前に起床し、その時にはまだ辺りは薄暗かった。どうやら日照時間のピークは過ぎ、ここから少しずつ日の出が遅くなっていくのだと思われる。

今日は晴れとのこだが、今は少しばかり薄い雲が空全体を覆っていて、まだ朝日を拝むことができない。天気予報を見ると、もう少ししたら雲が晴れてくるようなので、しばらくしたら朝日が街に降り注いでくるだろう。

今日から週末を迎えたが、いつもの通り、何も変わることなく、創作活動と読書の双方に打ち込んでいく。来週の木曜日からはいよいよアテネ旅行が始まる。4ヶ月ほど前に実現する予定だったこの旅行を今からとても楽しみにしている。この半年間、一度も公共交通機関を利用しなかったのも、フローニンゲンからスキポール空港までの列車の雰囲気はどのようなものなのかを確認したいし、現在のスキポール空港の稼働状況なども確認したい。

いつもフライトの前に使っているラウンジは利用可能とのことだが、セルフサービスではなくて、コロナの影響で飲み物も食べ物も注文式に変わっているようだ。アテネ行きのフライトは昼過ぎなので、空港に早めに到着し、3時間弱ぐらいをラウンジで過ごしたいと思う。

今回の旅行からはiPad Proを持参して絵を描けることが嬉しい。これまではラウンジで日記の執筆や作曲実践を行っていたが、そこに絵を描くことが今回から加わった。旅先においても、iPad Proであれば携帯しやすいので、アテネの古代遺跡や博物館などにも気楽に持っていきことができ、休憩がてらその場で絵を描いたりすることができるだろう。旅と創作活動がこのように連動していることを嬉しく思う。

今回のアテネ旅行は、また自分の創作活動に大きな刺激を与えてくれるだろう。そしてそれは創作活動だけではなく、その他の探究や実践にも必ず影響を与えてくれるはずだ。真の学習は自分を変えてくれる。それと同じように、真の旅は自分を変えてくれるものなのだと思う。

フローニンゲンの夏はとても涼しく過ごしやすいのだが、それでもほぼ毎年北欧諸国に旅行に出かけていた。今年はそれが足りないぐらいにフローニンゲンが涼しいようなので、8月はフローニンゲ

---

ンで過ごそうかと思う。9月に関しては、少し前の日記で言及したように、スイスのアスコナやドルナッハに滞在するかもしれない。あるいは、オランダの国内旅行として、モンドリアン美術館にそろそろ足を運びたいという思いもある。日本への秋の一時帰国は10月の半ばであるから、それを考えると9月はオランダの国内旅行にとどめてもいいかもしれない。そのあたりはもう少し考えよう。

アテネ旅行から帰ってきてからでいいので、オンラインを通じて書籍を購入するだけではなく、フローニンゲンの街の中心部にある古書店ISISに行こう。久しぶりに店主のセオさんと話をしたい頃合いだ。夫婦で経営しているこの古書店はいつも雰囲気が高く、店内で流れているクラシック音楽も心を落ち着けてくれる。古書店に訪れた際には、倫理学・道徳学・価値論の書籍を求める。

ロールズやハーバマスの書籍で持っていないものがあれば、オンラインではなくセオさんの店で購入してもいいだろう。美学の書籍については2年前に大量購入したのだが、それ以降また良い書籍が入っているかもしれないので、美学関連の書籍も確認してみよう。

来週末から滞在するアテネでも古書店を巡ろうと計画している。アテネ市内には相当な数の古書店があり、すでにいくつかの店については調べている。古代遺跡や博物館を巡るのと合わせて、古書店巡りも行い、そこで良書との出会いがあればと思う。フローニンゲン:2020/7/18(土)06:02

## 6022. 今朝方の夢

時刻は午前6時を迎えた。今朝は無風であり、世界がとても静かだ。絶え間ない静けさの中にあつて、日々自分の取り組みを少しずつ前に進めることができている。こうした日々の小さな前進は、自分の人生を少しずつ深めることに寄与している。自分の取り組みを遮るものや煩わしいものが一切ないこの環境に本当に感謝している。

今朝方もまた印象に残る夢を見ていた。夢の中で私は、バスの中にいた。走っているバスの窓から見える景色を確認すると、そこはどうやら地元のようなようだった。地元といっても、日本の両親がいる場所と大学院留学をしたカリフォルニアが混ざり合っているような場所だった。実際にバスの中には日本人と外国人が半分半分乗車していた。ふとバスの前方を見ると、ジョン・エフ・ケネディ大学時代にお世話になっていた、ヴァニース先生がいた。彼女は、私が在籍していたプログラムのトップを務めていて、キャンパスビジットの時からお世話になっており、合計で2年半ほどの付き合いがあった。

---

ヴァニース先生は私の存在に気づき、バスの前方から私に向かって問いを投げかけた。バスの中は静かであり、小さな声を発しても十分に後ろまで聞こえるような不思議な音響空間を持っていた。

ヴァニース先生からの質問は、人生の最後の瞬間の過ごし方に関するものだった。その質問を受けた時、私はまさに昨夜覚醒状態の時にそのことについて考えていたと気づいたのである。今この瞬間のように、覚醒状態から夢について思い出すことは頻繁にあっても、夢の中の夢見の状態から覚醒状態中の体験について思い出すことは滅多にない。その点について驚きがあった。

ヴァニース先生の質問に答える前に、先生はふと、バスの天井を指差した。見るとそこに、自分が発見した物理法則の数式が吊り革広告のように掲載されていた。その横には、誰か別の人が発見した数式が掲載されていた。私は、自分が発見した数式がそこに掲載されていることを嬉しく思った。その余韻にしばらく浸った後、先生からいただいた問いに答えようと思った。真摯に、かつ誠実に答えようとするほどに感動が込み上げてきて、思わずに言葉に詰まった。

ちょうどバスが停車し、日本人が続々と降りていき、バスの中には少数の外国人と先生だけになったので、そこから私は英語で回答することにした。全て話し終わると、先生は優しく微笑んでいた。そして、先生はスッとどこかに消えた。

次の夢の場面もまたバスの中だった。先ほどとは異なり、今度は完全に地元を走っているバスの中にいた。どうやら私は実際に通った中学校に通っているようであり、学年としては3年生だった。現在修学旅行中であり、その旅行が終わりに向かっていて、自宅に戻っている最中だった。そのバスは観光バスではなく、一般のバスであり、同学年の友人はほとんど乗っていなかった。

バスの進行方向に向かって腰掛ける椅子ではなく、通路を挟んで対面式で腰掛ける椅子に私は座っていた。私の左右には友人がいて、そのうちの1人が私に話しかけてきた。何やら、親友(KF)が自分にメールをしたとのことであり、それを確認して欲しいとのことだった。私はカバンにしまっていたガラケーを取り出し、メールを確認しようとした。インターネットがちゃんとつながっているか心配に思ったが、別にネットに接続されていなくてもメールを確認することができるようだった。

メールを確認すると、確かに友人からのメールが届けられていた。すぐにメールを開くと、「今夜の夕食をうちで一緒に摂らないか？」とのことだった。それはとても有り難い申し出だったのだが、今



---

日は自宅ゆっくりしたいと思って、また次回にして欲しいとお願いする返信をした。すると、バスは目的地のバス停で停車した。そこから自宅までは数百メートルであり、ついでに自宅の横にある学校の様子を見てから帰ろうと思った。

バス停からとぼとぼ歩き始めると、後ろから私を呼ぶ声がして、振り返ってみると、小中学校時代の友人(RK)だった。彼は自転車に乗っていて、私を後ろに乗せて家まで送り届けてくれると言う。それは有り難かったので、自転車の後ろに乗せてもらうことにした。そこから自宅まではさほど距離がなかったため、すぐに自宅周辺に到着した。そこで降りてもらったときに、彼にはお世話になったので、バスに乗る前にスーパーで購入したアメをお礼としてあげようと思った。

パックには結構な量のアメが入っており、手を入れてもらって好きなものを1つどうぞと述べた。すると彼は、2つアメを取り出した。私は2つでも構わなかったため、彼に味の違う2つのアメをあげ、そこで別れた。

自宅に向かう前に、まずは山道に面したテニスコートの様子を確認した。するとそこでは、同学年の友人たちが上半身裸でテニスをしていた。時刻はもう夕暮れ時だったが、彼らにとっては相当に暑かったのだろう。

テニスコートの横を通り、グラウンドを眺めると、低学年の生徒たちが、サッカーやバスケットをして楽しんでた。バスケットコートには1年生がいて、彼らはまだ小さく、練習をしている姿が可愛らしかった。また明日から彼らにバスケットを教えたいという思いが高まり、少しばかり彼らの練習風景を眺めていた。その後、校舎のある方に向かっていくと、そこで驚くべき光景を目にした。そこにあったはずの校舎がなくなっていて、先ほどとは別のバスケットコートができており、リングが物凄い高さになっていた。

そのコートを通り抜けると、見たことのないような古さの校舎が続々と建っていて、その様子は圧巻であった。いつの時代に使われていたのかわからないような古さの校舎には汚さを感じることはほとんどなく、むしろ歴史を感じさせた。それはどこか中世の城のような建造物のようにすら思えた。とは言え、そうした古い建造物に取り囲まれてみると、その場全体がお化け屋敷のように薄気味悪いものに思えたことも確かである。歩いてきた方向からして向かって右側の校舎には、巨大な絵画がい

---

くつか飾られているらしく、後ほどそれらを見てから自宅に帰ろうと思った。そこで夢から覚めた。フ  
ローニンゲン:2020/7/18(土)06:34

### 6023. 涼しげな土曜日の午後に

時刻は午後2時を迎えた。つい先ほど仮眠から目覚めた。今日の仮眠では特にビジョンを見ることはなく、ベッドの上に横になったらすぐに深い意識状態に入って行った。そこで治癒がなされ、目覚めたときの目覚めも良かった。

今朝は起床してすぐの時間帯には少しばかり霧がかかっていたが、午前中の早い段階から晴れ間が広がり始め、今も晴れている。とは言え、常温で保存しているココナッツオイルが、寒さのために液体ではなく固体の状態になっている日々が続く。うだるような暑さで参ってしまうよりも、今の気候が快適なのは言うまでもなく、その点については感謝をしよう。

午前中に、チョギヤム・トゥルンパの“The Sacred Path of the Warrior, Cutting Through Spiritual Materialism, and The Myth of Freedom”を読み終えたので、ここからはジャン・ゲブサーの主著“The Ever-Present Origin”を読み進めていく。今この瞬間に関心のある章をとりあえず読んでいきたいと思う。読書がひと段落したら1度作曲実践を行い、そのあとは入浴までの時間を、「一瞬一生の会」の補助教材として音声ファイルを作っていこうと思う。気がつけばこの教材も130の音声ファイルとなり、時間に換算して40時間(2400分)ほどの分量となった。

来週の月曜日が折り返しの第3回目のクラスであるから、全6回のクラスが終わるときには相当な量の教材になっているように思える。このような形で1人で話をするのもまた、自分にとってはまたとない学習機会になっている。日々読み進めていく読書の内容を文章に書くだけではなくて、話をする事を通じて自分の血肉にしている。こうしたアウトプットの間があることに感謝をしたい。

現在、霊性学、美学、音楽理論、倫理学、批判理論といった少なくとも5つの分野に関する修士課程に同時に在籍しているような感覚で、毎日専門書と向き合っている。現在は学術機関に所属していないので、有料ジャーナルを無料で読めるような環境にいないため、専門書を読み進めることが多いが、それでも探究は十分に深まっている。ここから数年ほどそれら5つの分野のそれぞれに関して、修士号レベルの知識を獲得し、博士課程の進学に向けて準備を進めていこうと思う。正式に

---

大学院から授与した修士号は今のところ3つだが、そこから非正式な形で修士課程レベルの知識をさらに5つの領域において獲得しておけば、納得のいく博士論文が執筆できそうだ。

いずれの領域に関しても参照するのは専門的な書籍であり、決して質の低い情報を得ることのないように気を付ける。それらの領域は自分にとって大切なものであるから、できるだけ良質な知識を得るようにしたい。また何よりも、食実践と同じく、どのような質の知識情報と触れるのかが、自分の精神空間に大きな影響を及ぼすことから、目に触れる知識情報の質には細心の注意をしたいと思います。フローニンゲン:2020/7/18(土)14:27

#### 6024. ボディ・マインド・ソウル・スピットのホロン構造:「ソウルメイト」と「スピリットメイト」

時刻は午後7時を迎えた。今日もまた非常に充実した1日を過ごすことができた。

午後にふと、ボディ・マインド・ソウル・スピットのホロン構造について考えていた。その中で、改めてソウルとスピリットの違いについて考えていた。その違いとして、上位のホロン階層が下位のホロン階層に影響を与えるという「下向因果(downward causation)」の観点で言えば、ソウルは私たちのマインド(思考・感情・意思)に影響を与え、スピリットはソウルに影響を与える。

この違いに関しては聖書についても言及があり、聖書にはその他にも、ソウルではなくスピリットが神を認識する働きを持つと書かれている。その点において言えば、ソウルは人間のマインドが持つ見えない特質(思考・感情・意思)に影響を与え、スピリットはソウルでは認識できない高次元の現象を認識する働きを司っていると言えるだろう。そのようなことを考えていると、マインドはボディに影響を与え、ソウルはマインドに影響を与え、スピリットはソウルに影響を与えるという関係が見えてくる。もちろん、そうした下向因果だけではなく、上向因果(upward causation)も存在しているため、それらのホロンは相互作用している点も忘れてはならない。

そうした上向因果の大切さを示唆するのが、古くからの格言である「健全なボディには健全なマインドが宿る」というものだろう。これをさらに上位のホロン階層に適用すれば、「健全なマインドには健全なソウルが宿る」「健全なソウルには健全なスピリットが宿る」ということが言えるだろう。そのようなことを考えていると、やはり下位のホロン階層の健全さをいかに確保するか、そして下位ホロンという土台をいかに堅牢なものにしていくかが大切だということを改めて思った。



---

そこからは、現代社会の人間関係と上記のホロン構造とを絡めて考えていた。現代人は、どうしても人との会話をマインドの次元に留まって行いがちであり、人を物質や機械のように扱う光景に遭遇することがよくある。ここでは人との関係性というものをボディやマインドの次元まででしか捉えていないことが見えてくる。それらよりもさらに高次元のソウルやスピリットの次元での人間関係が希薄なのではないかという問題意識が芽生える。

「ソウルメイト」という言葉があるが、実際にそのような交友関係がある人は稀であろうし、「スピリットメイト」になると、そもそもそのような言葉を聞いたことがないぐらいにそうした交友関係を築けている人は稀だろう。現代の人間関係は、「ボディメイト」や「マインドメイト」どまりなのではないかということが見えてきて、ここにおいても現代社会における人間関係の質の低さが窺える。ソウルやスピリットの次元での対話と人間関係の構築。そしてソウルメイトやスピリットメイトがいるような豊かな交友関係。それらが実現している社会に思いを馳せる。フローニンゲン:2020/7/18(土) 19:32

#### 6025. アテネ旅行に向けた食事調整

時刻は午前5時半を迎えた。昨日と同様に、今朝は5時前に起床し、目覚めた時刻は4:44だった。こうした形で同じ数字が全て揃うと気持ち良さがある。今、外の世界は無風であり、辺りは少し明るい。日の出の時間が少し遅くなったことを実感する。

保存してあったサツマイモを全て食べ終えたので、昨日の夕食からオーガニックのブロッコリーを味噌汁に入れ始めた。茹でたブロッコリーを半分ほど味噌汁に入れ、残りの半分はチーズと和えたジャガイモに入れて食べてみたところ、どちらも共に美味しかった。また、サツマイモを食べていた時よりも消化吸収が良いように感じ、ここからはブロッコリーを積極的に取り入れていこうと思う。

早いもので、4日後からアテネ旅行が始まる。コロナで随分と世界が混乱していたこともあり、まだ旅が始まるという実感がない。アムステルダムスキポール空港の様子や、アテネの様子など、実際に行ってみないとわからないことがたくさんある。どちらも共に少しずつ以前の状態に戻りつつあるようだが、実際に今の状態をこの目で確かめて来ようと思う。

ギリシャ政府は、コロナ対策を当初からうまく行っており、ギリシャはヨーロッパ諸国の中でもコロナの被害は最小の部類に入る。一方で、オランダは被害の大きい部類に入る。オランダは警戒国に

---

入っているようなので、ギリシャに入国する際には、まだ検査が必要かもしれない。それでも日本のように空港近くに2週間隔離されるということはなく、その場での検査結果がどのようなものであっても、適切な対処が個人に課せられる。検査の時間がどれくらいかかるかわからないが、今回は昼の便でアテネに向かうため、夕方過ぎにはホテルに到着できると期待する。

木曜日からのアテネ旅行に向けて、ここからは食糧に関して新たに購入することを控え、今あるものを分けて食べようと思う。今あるジャガイモをうまく配分することによって、今日を含めた4日間の夕食にしよう。計算をしてみると、当日までにリンゴが2つ、玉ねぎが2つ不足しそうなので、いつもはそれらの袋詰めを購入するのだが、今回は街の中心部のEkoPlazaでそれぞれを単品で購入しよう。また、当日の朝に飲む瓶詰めのオーガニックコーヒーも合わせて購入しておきたい。

オランダもオーガニック食品店が充実しているが、アテネはそれ以上の印象がある。市内の各地にオーガニック食品店があり、今回ホテルを選ぶ際にも、良さそうなオーガニック食品店が近くにあることを条件にした。アテネ市内に到着する時間がまだ夕方であるから、ホテルに到着後、近場を散策するがてら、最寄りのオーガニック食品店に足を運ぼうと思う。

私は毎回旅から帰ってくるタイミングでファスティングを行っている。前回の旅が半年前だったということもあり、ファスティングは半年ほどご無沙汰だ。ちょうど自分の中でも、そろそろファスティングを行うタイミングにあると感じていたので、今回アテネから帰ってきたら、飲み物だけのファスティングを数日間ほど行おうと思う。それは長いものである必要はなく、3日から5日間ほど固形物を摂取することをやめ、回復期を合わせると6日から10日ほどのものになるだろうか。今回のアテネ旅行は、旅の後のファスティングをする楽しみも含めて、色々と充実したものになる予感がする。フローニンゲン:2020/7/19(日)05:52

#### 6026. 多様性の尊重や「べき論」と規範性

昨日、多様性の観点から分離と統合について考えていた。多様性を尊重することは、社会のお題目として昨今唱えられているが、真に多様性を尊重し、そこから何か行動につなげていくことは意外と難しく、現状においてそれが成功しているとはあまり思えない。そこでは、単に多様性を尊重するという姿勢や発想だけがあり、多様性という無法地帯を作るような働きかけが行われ、結果として

---

様々な人たちの分離が起こっているように思える。多様性を認め、多様な人間を包摂していくというのは聞こえがいいが、この社会には生得的に社会悪を行うことに何の抵抗も感じないサイコパスやソシオパスの人間などもあることを考えると、全ての人間を何でもかんでも包摂すればいいという発想は危険なものに映る。その際にはやはり、どのような人間をどのように包摂していくべきなのかという規範的な考え方が重要になり、それについて対話をするための公共空間と実際の対話は不可避に要求される。

多様性を包摂することが社会の変容やイノベーションを生み出すことにつながるためには、そうした規範的な枠組みと対話をするための公共空間及び実際の対話、そしてそこからの協創が求められる。そのようなことを考えており、ちょうど今日から読み始める、ヨルゲン・ハーバマスの“Moral Consciousness and Communicative Action”にはそのあたりの論点についてヒントなることがたくさんあるだろう。

また、昨日ふと、元ハーバード大学教育大学院教授のハワード・ガードナーが執筆した“Truth, Beauty, and Goodness Reframed”という書籍を本棚から取り出しており、本書は現代社会における真善美について議論している。とりわけ善に関するガードナーの思想を参照しながら、今自分が関心を持っている様々なテーマについてあれこれ考えを深めていきたい。

規範性の伴う議論を単なる「べき論」で終わらせてしまうのではなく、そのべき論を実行に移すための具体案を考え、それを遂行していくところまでが自分が考えている規範性のある行動であり、ハーバマスの「コミュニケーション的行動 (communicative action)」という言葉にもそうした意味が込められているのではないかと思う。

この社会には、べき論だけを語る評論家のような人間はたくさんいるが、そもそも彼らが高い規範性に基づいてべき論を展開しているかというところとそうではないケースが多いように思える。そもそも、高い規範性を備えていれば、それが単なるべき論で終わるはずはなく、規範性を遂行するという具体的なアクションが伴うはずである。そうした人こそが、高い規範性を備えた人だと言えるのではないだろうか。さらに言えば、べき論を具体的なアクションにまでつなげていくためには、高い規範意識だけでなく、規範性を発揮する領域固有の土地勘、つまり知識と経験も必要になってくるだろう。高い規範意識と土地勘の双方が掛け合わさってはじめて、その土地において向かうべき具体的な方

---

向性を示すことが可能になり、実際にそちらに向かっていくための適切なアクションを遂行することにつながっていくのだと思う。

真善美の関心が高まる中で西洋哲学が生まれたアテネの地に足を運ぶことには何か意味があるように思えてくる。3月末ではなくて、このタイミングでアテネに足を運ぶことになった必然性のようなものをひしひしと感じる。フローニンゲン:2020/7/19(日)06:10

#### 6027. 物質消費的対象ではない創作活動と読書に向けて:今朝方の夢

時刻は午前6時を迎えた。外は先ほどよりも明るくなったが、空には薄い雲がかかっている、今日は輝く朝日を見ることはできそうにない。夜までは曇りがちな天気になるらしく、夜には小雨がぱらつくそうだ。

それでは今日も、夢の振り返りを行ったら、創作活動と読書の行き来をしたいと思う。ここ最近では、本当に両者がうまく相互作用をする形で実践されており、とてもいい流れにあるように思う。創作活動一辺倒では、創作に必要な内的成長が促されなかったり、創作に必要な刺激が乏しくなってしまう。一方で、読書だけだと、言語の分節化機能による言語束縛を受け、知覚世界の可能性を最大限に引き出すことができなくなってしまう。そうしたことから、非言語と言語を行き来する今の実践は、自己を深める上でとても良いものになっている気がする。

ただし、チョギヤム・トゥルンパの言葉を借りれば、「霊性の物質化」と近いことが行われていないかについての注意が必要だ。つまり、自我の特性に囚われる形で、単に自己を深めることを目的にしてそうした取り組みに従事していないかに対する注意が必要だということである。さらに言い換えれば、創作活動や読書が、自我を肥大化させることにつながっていないかに対する注意が必要だということである。幸いにも、創作活動も読書も、自我を肥大化させる方向ではなく、むしろ自我を限りなく縮小させる方向に向かって行われており、自己を深めるというのは、自我の束縛による解放も意味されている。そうした観点において、創作活動や読書が物質消費的対象になっていないことは確かであるが、この点については絶えず注意を払っておこう。トゥルンパが指摘するように、私たちの自我はとにかく狡猾であり、ちょっとでも気を抜くと、全ての対象を自己の保存と満足のために消費しようとするからである。

---

今朝方の夢。夢の中で私は、日本だが見慣れない街にいた。その街はそこそこ発展しており、私は住宅地にいた。住宅地の一角に父方の祖母の家があり、私はそこを訪れた。家の中に入ると、知らない人たちが何人かいて、何かに関する話し合いが行われていた。

話し合いの雰囲気は悪いものでは決してなかったが、みんな静かに話をしていて。話し合いが行われている部屋の横の畳部屋には、サッカー界で今でも活躍する伝説的な選手がいて、その方から奥さんとの出会いについて話を聞いていたように思う。

しばらくして私は祖母の家を後にすることにした。玄関先で祖母に別れの挨拶を述べた後、私はバス停に向かった。途中で比較的大きな道に出て、時間を短縮させようと思って車道を横切ろうとすると、軽自動車が向こうからやってきた。だが幸いにも、その軽自動車はゆっくりと走っていたので、問題なく車道を渡れた。

すると、パトカーがやってきて、それは赤信号で止まった。赤いライトを点滅させているそのパトカーから、警官が声を発しており、どうやら右折に関して指示を出しているようだった。パトカーが止まっている道路と垂直関係にある他の道路において、2車線のうち片方の車線しか右折ができないようなのだが、それを守らない車があるため、そうした車に対して注意をしているようだった。

そこから私は、バス停まで早歩きで向かい始めた。ふと自分の手元を見ると、両手にはそれぞれカバンを持っており、それらは結構重かった。どうやら本が入っているようだった。重たいカバンを持ちながらバス停に向かっていくと、バス停には長蛇の列ができていた。私はバスに乗って空港に行き、そこから飛行機に乗って移動する必要があったので、少しでも早く空港に到着したかった。そのため、早く列に並ぼうと思い、ここでもバス停の目の前の車道を横切ることにした。すると、列の途中あたりに小中高時代の親友(SI)がいることに気づき、彼に話しかける形で列に入れてもらった。

するとそこで2人の身体が瞬間移動した。親友と私は、どこかのセミナールームのような場所にいた。そこで友人が、15人ぐらいの哲学者の名前をある順番に沿って読み上げるというゲームをし始めた。そのゲームをより具体的に説明すると、15人の哲学者の名前をある順番に沿って読み上げながら、1人1人の哲学者の名前が書かれた札を専用のボックスの中に順番通りに置いていくというものだった。どのような規則性で哲学者の名前の順番が決定されているのかはわからず、どちらか



---

という記憶力を試すようなゲームなのかと少し思った。私は友人を見守る役を務めており、友人が1人の哲学者の名前を読み上げるたびに、札をボックス内に置いていく役割を務めていた。

ゲームが始まってみると、友人は順調に名前を読み上げていった。このゲームのもう1つの特徴としては、最初に、ある規則性に沿って後ろから前に向かって名前を読み上げていく必要があり、最初に戻ってきたら、再びそこから最後の哲学者に向かって名前を読み上げていくというルールがあった。最後から最初に向かい、最初から最後に向かって順番通りに哲学者の名前を読み上げることができたらゲームの成功となる。友人は12人の哲学者の名前をそれほど詰まらずに名前を読み上げていった。しかし、そこからピタリと止まった。

次に待っていたのはカントであり、その次はフッサールだったのだが、それらの哲学者はあまりにも有名であり、私はまさか友人がそこで詰まるとは思ってもいなかった。もうそこでゲームオーバーかと思ったが、私は友人にぜひこのゲームをクリアしてほしいと思ったので、箱の後ろから小声でヒントを出した。すると、友人はそこからカントとフッサールを思い出し、最後の哲学者の名前を言うことができた。前半部分はクリアだった。私の中では、一度最後から最初に向かって名前を読み上げることができたら、後半の逆に遡っていくことに関してはそれほど難しいことではないのではないかと思っていた。

いよいよ最後の哲学者のところまでやってきたのだが、その哲学者はロシア人のとてもマイナーな人物であり、私もその人物の名前をその時まで知らなかった。残念ながら友人もその人物の名前を思い出すことができず、ゲームオーバーになった。ゲームオーバーになった後、友人は悔しげな表情を浮かべて、最後の哲学者の名前を教えてくれと私に述べた。そこで私は、札に書かれたそのロシア人哲学者の名前を読み上げようとしたのだが、何と発音したらいいのかわからず、とても辿々しくその人物の名前を何回か読み上げた。フローニンゲン:2020/7/19(日)06:46

### 6028. 死と霊性:集合のシャドーワークの大切さ

時刻は午後7時を迎えた。今、日曜日がゆっくりと終わりに向かっている。毎日のことではあるが、今日も幸いにも充実感と幸福感に溢れる1日だった。明日からは新たな週を迎え、来週の木曜日からはアテネ旅行が始まる。来週は旅行の前に3件ほどオンラインミーティングがあり、月火水のそれ

---

それぞれに1つずつミーティングが入っている。それらはどれも異なる協働プロジェクトであり、それらの仕事を終えてから旅行を開始できることは有り難い。

午後、霊性の涵養に関する重要性について、死と絡めて考えていた。私たちにとって、人生最後の瞬間の最も重要な体験として死がある。死をどのように受け止め、それをどのように体験するのかに関して、霊性は密接に関係している。これは自分自身の死についてもそうであるが、愛する動物や家族が亡くなった時にも自身の霊性の成熟度合いは、そうした出来事に対する意味付けと受け止め方に大きな影響を与えるがゆえにとっても大切なように思える。グリーフセラピーやスピリチュアルケアというのは、単に認知や感情に関与していくものではなく、それらは霊性に深く関係したものだと思う。

私たちには見えていない形で、日常には死が溢れている。毎日世界の至る所で新たな生命が誕生しているのと同じぐらいに、毎日世界の至る所で生命は死を迎えている。霊性の発達は、こうした日常にある死という現象に対する感性・感覚を変えていく。霊性が涵養されていなければ、日常に溢れる死は他人事として見做されてしまい、身近な人が亡くなった場合においては、その意味付けと受け止め方に困惑し、精神的な危機を経験しかねない。また、自身が死に近いていく際にも、大きな実存的危機を経験しかねない。死というのは誰も平等に経験するものであり、また死は日常の至る所に溢れているものであるがゆえに、霊性学というのはこの人生を生きていく上で不可欠のものであり、また実践的なものである必要があることに改めて気づかされる。

それ以外にも、夕方には、集合のシャドーを捉えることの大切さについて考えていた。ここは見落とされがちのように思うのだが、個人の変容にシャドーワークが必要なのも同じく、チーム・組織・業界・社会の変容にもシャドーワークが不可欠なのである。様々な集合次元におけるシャドーが何かを特定し、それを治癒していく必要性についてここ最近では考えることが多い。個人のシャドーも対象化が難しいが、集合のシャドーもそれが大きな規模で暗黙的に共有されている、ないしは暗黙的に働いているものであるがゆえに対象化が難しい。

集合規模のシャドーワークをする上では、フランクフルト学派(第1・第2世代)の批判理論や、来月から読み進めていこうとしているスロベニアの哲学者スラヴォイ・ジジエクの発想が参考になるだろう。実践霊性学や実践美学について探究と実践をしていこうと思っている背景には、霊性や美というも

---

のに対する社会の意識が希薄であり、それらが社会のシャドーのような存在になってしまっていることが挙げられる。そうした観点から、集合規模でのシャドーを対象化し、それを治癒していく試みと、実践霊性学や実践美学の探究と実践は足並みを揃えたものだということがわかる。フローニンゲン:2020/7/19(日)19:32

### 6029. 美と善に関するミームの創出と伝承:「発達倫理」の大切さ

時刻は午前6時を迎えた。もうこの時間帯はすっかり明るく、今朝は朝日が燦々と地上に降り注いでいる。朝日に照らされた赤レンガの家々も喜んでいてるかのようだ。

今年のフローニンゲンは冷夏であり、今日の最高気温は19度、最低気温は9度とのことである。明日と明後日もほぼ全く同じ気温である。一方で、明明後日から滞在するアテネは打って変わって灼熱のようである。フローニンゲンは曇りや小雨の降る日があるが、アテネはもっぱら快晴続きのようだ。最高気温は35度弱あり、最低気温も20度を超えている。

思い返してみれば、このような暑さの夏を経験することは本当に久しぶりなのではないかと思う。というのも、フローニンゲンに来てからは毎年涼しい夏を過ごしていたし、夏の盛りも北欧に滞在していたからだ。そう考えてみると、夏らしい夏を感じたのは今から4年前に日本に1年間住んでいた時の夏なのではないかと思った。そう考えると、実に4年ぶりに夏らしさを感じることになる。

アテネ旅行に向けての荷物の準備は前日に行うが、旅行の日までに食べる果物や野菜についてはもう少し補充する必要があるので、明日にでも街の中心部のオーガニックスーパーに行こうと思う。そこでは、行きのスキポール空港までの列車の中で飲む瓶詰めのオーガニックコーヒーを購入することを忘れないようにする。

昨日は、ハワード・ガードナーが執筆した真善美に関する書籍を読んでいた。それは2読目であり、初読の際とはまた違った発見がいくつもあった。読書は本当に、自分が成長を遂げていけば、毎回違うことを学ばせてくれる。そこから汲み取れるものが異なってくるし、同一テーマに対する考えもまた以前と異なったものになる。

---

再読をしながら雑多なことを考えていた。1つ目に、美と善に関するミーム(文化的遺伝子)の創出とその伝承について、2つ目に、視覚的な美と善と聴覚的な美と善について、3つ目に、「生命倫理(bioethics)」のような観点で、「発達倫理(developmental ethics)」のようなものが必要かもしれないということについて考えていた。

1つ目に関しては、美と善に溢れた発想や行動を文化的な遺伝子にするための取り組みと、それを浸透・継承していくことについて考えていた。2つ目に関しては、今現在自分が取り組んでいる創作活動は、視覚的・聴覚的な美の双方に関する実践であり、そこから2つの異なる感覚器官を通じた善意識というものもあるのではないかと考えていたのである。3つ目については、発達に関する対話と実践を導くものとして、発達を取り巻くリテラシーには、「発達倫理」とでも呼べるような倫理的な側面を含む必要があると考えていた。どのような領域においても、「規範性(normativity)」というのは発想と行動を導くものなのだ。それは発達に関する対話と実践においても同じである。自分自身の発達倫理を高め、その知見を共有するような取り組みにこれから少しずつ従っていきたいと思う。

フローニンゲン:2020/7/20(月)06:30

### 6030. 今朝方の夢

時刻は午前6時半を迎えた。空は澄み渡っており、優しい朝日が地上に降り注いでいる。今年の夏は例年以上に過ごしやすく、とても有り難く思っている。今年の夏は、フローニンゲンで寛ぎながら、自分の取り組みに没頭していこうかと思う。来月の初旬にもいつもと同じように、書籍を一括注文しようと考えているのだが、いつもよりも購入量を倍に増やしてもいいかもしれない。それぐらいに読みたい専門書が文献リストに溜まっている。

イギリス、オランダ、ドイツのアマゾンと比較しながら、毎月書籍を大量注文することは月初の行事となった。大量に書籍を注文するとは言え、30冊程度にしようかと思っている。それらは全て学術書であるから、1冊1冊がそれなりの金額なのだが、そうした金額では決して測れないほどのものを自分にもたらしてくれる。その道に精通する学者が執筆した書籍が5千円かそこらで購入できてしまうというのは、よくよく考えてみれば、とても良心的なことなのだ。書籍の内容の講義を彼らにお願いすれば、そのような金額で収まるはずはないのだから。

---

昨日、ある方からのメールの中に、シュタイナーの経済論について言及があった。その方の意見が興味深く、仮想通貨や電子貨幣を含めた貨幣を信念エネルギーの媒体として捉え、そこに愛や叡智を注ぎ込むことは可能だという意見である。私もその発想に賛同している。しかし現代社会においては残念ながら、貨幣は単なる価値の交換における物質、ないしは道具としてしか見られてないように思う。ちょうどシュタイナーの社会・経済論に関する書籍を近々購入しようと思っていたところなので、このテーマについてもまた考えを深めていきたい。

それでは、今朝方の夢について振り返りを行い、今日もまた自分の取り組みを前に進めていこうと思う。夢の中で私は、中学校時代の部活の先輩数人と一緒に、誰かの家に宿泊していた。そこはプレハブ小屋のようであり、そこには2階はなかった。数名と一緒に1階の部屋で何かについて和気藹々と話をしていて、しばらく話をしていると、プレハブ小屋の外に誰かまた別の先輩がやってきて、扉をノックしたところで夢の場面が変わった。

次の夢の場面では、私は実家のマンションの前にいた。しかしそのマンションは、実際に両親が住んでいるものとは違った。またそこは持ち家ではなく、なぜか賃貸であり、自分も家賃を幾分か払っていた。マンションの1階で、高校時代の2人の友人と遭遇し、彼らと少し立ち話をしていて、そのうちの1人の友人が車を移動させるためにその場を離れた。残ったもう1人に私はそっと、今その場を離れていった友人の体臭のキツさについて話をした。話しかけられた友人はあまりその点に自覚的ではなかったようであり、改めて彼が車を移動させることから戻ってきたら匂いを嗅いでみるとのことだった。そこから私はマンションの玄関に入り、自宅のある階に向かった。

すると、そのマンションには進学塾も入っていることに気づき、そう言えばこれから自分も授業に参加するのだということを思い出した。厳密には、授業前の朝のテストを受ける必要があったのである。塾に到着すると、朝のテストの開始時間が迫っていた。私はいつも早く塾に来ていたようであり、このようにギリギリになって塾に来るのは初めてのことだったから、先生たちも少し驚いていた。

職員室で名札を受け取り、それを持って教室に向かった。あと数秒でテストが開始されるというところで無事に教室に到着し、自分の席に腰掛けた。自分の席は、教室の1番右の列の前から3番目だった。まずはマークシートに名前を記入し、性別などの属性情報を鉛筆で塗りつぶしていった。そう言えば、洗った下着やタオルをスープに入れてこれまで食べていたのが、それはもう止めよう



---

と、塾に向かうまでのマンションの階段を登っている最中に思ったことを覚えている。フローニンゲン:2020/7/20(月)06:55

### 6031. メタファーを活用すること

時刻は午後4時を迎えた。今日は天気がとても良く、天日干しをしている椎茸たちも嬉しそうである。

アテネ旅行が明々後日に控えており、本日ようやく、7月の初旬に注文していた全ての書籍が届いた。今回は15冊ほど書籍を注文しており、そのうちの14冊がロイ・バスカーの思想に関するものだった。バスカーの書籍に関しては既に数冊ほど初読を終えたのだが、それらに並行して既に手持ちのヨルゲン・ハーバマスの書籍なども読み進めていたので、現段階では届けられた書籍のうち、まだ半分も読めていない。それらについてはアテネ旅行から帰ってきてからゆっくりと読んでいこうと思うし、8月の初旬に一括注文する書籍たちが届くまでに初読を終えたいと考えている。

専門書と日々向き合う形の生活が再び始まり、それによって自分の内側で何かが動き始めたことを感じる。そしてそれは創作活動にも好影響を与え、日々の充実感の源泉にもなっている。読書も食実践と同様に、どのような質のものをどれほどの量取り入れるのかが大切であり、今は無理のない形で、自分が消化吸収できる範囲の読書が実現しているので、それはとても良い傾向だ。

アテネ旅行中に市内の古書店に立ち寄ったり、美術館や博物館で画集や文献資料を購入するであろうから、行きに関しては薄い書籍を1冊だけ持っていくようにしたい。積読されているバスカーの書籍から1冊ほど選んで持っていこう。

今日は昼前から昼過ぎにかけて、「一瞬一生の会」の第3回目のクラスがあった。今日のテーマはリフレクションジャーナルについてであり、日々日記を綴っている私にとっても新しい発見や気づきがあり、改めてリフレクションジャーナルの意義と方法を見直すことになった。いくつも発見事項や気づきがあったのだが、1つとして、メタファーを通じた物語の治癒と再編纂をより意識していこうかと思った。言葉の世界には限界があるが、限界の先の世界にまで足を伸ばしてくれるのがメタファーの力なのではないかと思う。

---

何か特定の対象物や現象を明示的に言葉で指し示すのではなく、それによってこぼれてしまう事柄をメタファーとして捉えていくのである。そこに意味付けや解釈のさらなる余地が生まれ、それが発達の余地と呼ばれるものにつながるのかもしれない。また、理学者デイヴィッド・グローブが指摘するように、そもそもメタファーには治癒と変容の作用があることから、日々の日記の中でメタファーを意識的に活用してみようかと思う。それを直喩や隠喩の形で行っていこう。フローニンゲン：2020/7/20(月)18:21

### 6032. 発達を取り巻くメタファーを変容させること:学ぶことを愛する気持ちを育むこと

今日は天気恵まれた1日だった。朝には朝日を拝むことができ、今この時間帯には輝く夕日を拝むことができている。太陽が昇り、太陽が沈むという景色の中に有り難さが滲み出す。日常の中にある美を絶えず見出すこと。美を通じて日々を生きること。そしてそうした顕現する美に対して絶えず感謝の念を持つこと。それを忘れないようにする。

夕方に日記を執筆しているときに、メタファーについて触れていたように思う。そこから夕食の準備をしているときにも、メタファーの大切さについて考えていた。しかし夕方とはまた違う観点からそれについて考えていた。端的には、私たちが人間をどのようなメタファーで捉えるのかが、教育や人財育成のあり方や施策に大きな影響を与えるということである。現代において、私たちは人間をどのように捉えているだろうか？

過去には、フロイトが提唱した精神分析学においては、人間を蒸気機関車のようなメタファーとして捉えていた。そこから行動科学や認知科学が発展してからは、人間を機械のようなメタファーとして捉えてきた。現在の教育や人財育成のあり方や施策は、依然としてそのようなメタファーで人間を捉えているのではないだろうか。機械のメタファーを通じて人間のいくつかの側面を説明することはできるが、それは発達科学や他の学問領域の進展からすると、随分杜撰な捉え方である。

カート・フィッシャーを含め、現代の発達科学者は、人間を機械のように捉えることから脱却し、生命として、あるいは1つの生態系として人間を捉えるようになってきている。1つの生命ある有機体として人間を捉えていくこと。このメタファーがさらに浸透し、そのメタファーをさらに育んでいくことが私たちに求められているように思う。

---

教育や人材育成の小手先な技術を学び、それを導入してもほとんど意味がないばかりか、それは成長や発達に害を与えてしまう。外面的なことよりも、兎にも角にも、人間を捉えるメタファーの変容が求められている時代になってきていることを感じる。人間を生態系として捉えるメタファーが社会に広がり、さらに社会が一丸となってその意味付けをより豊かにしていくこと。それは今後の人間発達において極めて重要な社会課題のように思える。

そこからまた別のことを考えていた。現代の教育は、企業社会への徴兵制度的な側面からまだ脱却し切れていないのではないだろうか。いや、そもそも脱却する気がほとんど見られないように思える。

教育とは本来、将来に良い仕事に就くためにあるのだろうか？教育がその個人や社会を幸福にするためのものであり、そうした幸福の1つの実現方法として、自分が望む仕事に就くことがあると言うのであればまだ話は分かるが、現代の教育においては、どうも将来に良い仕事を就くためと言う観点があまりに強調され過ぎているように思えてならない。いや、もっと厄介なのは、それは明示的に強調されているのではなく、暗黙的な認識として、つまり集合的なシャドーとしてそうした発想が横たわっていることである。

そもそも現代の時代特性とは、極めて複雑性が高く、将来の見通しなどままたまらないものである。こうした変化が激しい社会において、今ある仕事が数年先に存在しているかどうかすらわからないのに、小さな頃から10年以上もかけて将来に良い仕事に就くために教育を施すというのは馬鹿げてはいやしないだろうか。

数年先にどのような仕事が存在しているのかわからず、またそのときに自分がどのような仕事に従事したいのかわからないのであれば、一体どのようなことが教育に求められるだろうか？それはたくさんの方が考えられるが、少なくとも、将来において仮に新しいことを学ぶことを要求されたときにも、自ら率先して学ぶことのできる姿勢を育むことが重要なのではないだろうか。言い換えれば、一生涯にわたって学び続ける姿勢を育むこと、もっと言えば、学ぶことを愛する気持ちを育むことを教育の根幹に置く必要があると思うのだ。果たして現代の教育を受けた人たちの一体どれほどが一生涯学び続け、そして学ぶことに対する愛を持っているだろうか？しかもその愛とは、純粋に学ぶこ

---

とを愛するという気持ちに加え、自己愛を満たすためではなく、自己と他者及び社会を慈しむ愛の精神に基づいたものである必要があるのではないかと思う。

学ぶことを愛し、その学びを社会に還元していくことを大切にすること。そうしたあり方がこれからの教育に求められるだろうし、そもそも時代を問わず、教育とは最初からそうあるべきものだと思うのだ。フローニンゲン:2020/7/20(月)19:30

### 6033. 外国を舞台にした今朝方の夢

時刻は午前7時半を迎えた。今朝は午前6時までゆっくりと睡眠を取っていて、目覚めた時には黄金色に輝く朝日を見た。寝室の窓からは、ちょうど太陽が昇る姿を見ることができる。今朝はとても力強い朝日の光を浴びることができて、いつも以上に目覚めが良かったように思う。

今日もまた天気がとても良いようであり、今日は明後日から始まるアテネ旅行に向けて、今日と明日の夕食に食べるものを少しばかり補給しておこうと思う。具体的には、玉ねぎの中を1つ購入し、ジャガイモの単品があれば、ジャガイモを少々購入し、なければ小さめのサツマイモを購入しようかと思う。それに合わせて、当日の朝にスキポール空港に向かう列車の中で飲む瓶詰めのオーガニックコーヒーを購入したいと思う。本日購入する必要があるのはそれくらいだ。

それでは、今朝方の夢について振り返り、今日も創作活動と読書に励んでいきたいと思う。夢の中で私は、どこかの国の郊外にある居住地域に作られた大きな公園にいた。そこは広場のようになっていて、遊具などは一切なく、芝生が広がっているだけだった。そこで私は、大学時代のゼミの友人(TA)と偶然出会い、彼と少し話をした。彼との話がひと段落すると、私は芝生の一角に腰掛けている少数の外国人男性たちの姿を見つけた。見ると、彼らはポーカーをして遊んでおり、私も入れてもらうことにした。しばらくポーカーをし、あるところで時間になったので、ゲームを終えることにした。すると、持ち分として私は2位の成績だった。

すると、1位の成績の男性が私に、得られたカネをどうするのかについて尋ねてきた。私はそれを何かしらの金融商品に投資しようと考えていると述べると、彼もそのつもりのようなだった。すると彼は、聴き慣れない金融商品に投資することを考えているらしく、それについて詳しく教えてもらうことにした。彼の話聞き終わると、3位の成績の男性が、ある北欧の投資銀行が組成した投資信託のパ

---

パフォーマンスがとても安定していて良いということを述べた。ちょうど手元には運用成果に関する一覧表があったので、それを眺めてみると、確かにその会社が提供する投資信託のパフォーマンスは安定的に高いリターンを誇っていた。そこで夢の場面が変わった。

次の夢場面では、私はトルコの観光地にいた。厳密には、トルコ領の島にいたのである。偶然ながら、そこで生活を営んでいる高校時代の女性の英語の先生がいて、私は数人の友人たちと一緒に先生の自宅を訪問した。先生の自宅は一風変わっていて、美術館のある1つの部屋が先生の自宅になっていた。

その美術館には数多くの展示室が迷路のように入り組んでおり、そのうちの1つが先生の家だった。先生の自宅に到着すると、私たちはダイニングルームに案内された。そこには年季の入った木製のテーブルが置かれていて、見るとそれは、自分がかつて使っていたものだということに気づいた。それを証明するために、私は1人の親友(KF)と一緒にテーブルの下に潜り込み、自分がかつて描いた落書きを発見した。それは馬のアニメのキャラクターであり、それを見て、とても懐かしい気持ちになった。

テーブルの下から出てくると、ちょうど先生が料理を運んできてくれた。それらはどれも美味しそうであり、テーブルの上にはよく冷えた缶ビールが置かれていた。しかし私はもうお酒は飲まないようにしているので、先生にお茶をお願いした。すると突然、私は先生の自宅から、同じ美術館内の別の部屋に瞬間移動していた。どうやらそこも誰か外国人の家のようなようだった。その部屋にはどこか哀しみが流れていた。

目を閉じて、その部屋の住人に何があったのかを想像してみた。すると、今から数年前にその島に大きな嵐がやってきたことを知った。そのときに、その家の住人は、家が嵐に飛ばないように色々と工夫をしたようだった。その家の一角には、床に穴が開いていて、そこからエメラルドブルーの海を眺めることができた。しかし、その海は水深が深く、流れも早い。嵐がやってきたその日は、さらに水位が上り、流れも早くなっていたようだった。そのような日に、その家の小さな子供が穴から海を眺めたときに、間違っただけで海に落ちてしまい、渦巻に巻き込まれて亡くなってしまったことを知った。その一部始終を撮影していた外国人が3人ほどいたらしいのだが、そのビデオはどこかの誰かが盗み出し、ビデオを削除してしまったとのことだった。



---

そこまでのストーリーが脳内に浮かび上がったところで目を開けた。その部屋にはまだ哀しみの雰  
囲気が漂っていて、私は亡くなった子供に対して祈りを捧げた。そこで夢から覚めた。フローニンゲ  
ン:2020/7/21(火)07:58

#### 6034. アテネ旅行に向けて:今朝方の夢の続き

時刻は午後7時半を迎えた。今日もまた、この時間帯になると美しく輝く夕日を眺め、夕方のひと時  
を味わっている。今日は午前中に雲が空を覆っている時間帯もあったが、午後からは晴れてきて、  
夕方に街の中心部に買い物に出掛けたときはとても心地良かった。

いよいよ明後日から始まるアテネ旅行に向けて最後の買い物をし、これで当日までの食料と、当日  
の朝の空港までの列車の中で飲む飲み物の確保も済んだ。荷造りは明日の夜に行い、明日は旅  
に出かけるに際して、部屋の中を綺麗にしておこうと思う。それには水回りやトイレの掃除なども含  
まれる。毎回の旅に合わせてファスティングを行っていただけではなく、そういえば比較的大きめの  
掃除を毎回していたことをふと思い出した。この半年間旅行に出掛けていなかったもので、細々とし  
た掃除は日々行っていたのだが、レンジやコンロなどの拭き掃除は随分と怠っていたように思うの  
で、明日はその辺りも綺麗にしたい。

この時間帯になって、今朝方の夢のある場面を思い出した。今朝方の夢の中では、2人の異なる若  
い女性と話をしていた。2人とも私の知り合いではなかったように思う。最初に話した女性の容姿や  
雰囲気は忘れてしまったのだが、2人目に話した女性はハーフのような淡麗な容姿を持つ女性だっ  
た。外見の美しさだけではなく、内面の美しさもあり、それでいてユーモアの精神にも溢れていたの  
で、話が盛り上がっていたことを思い出す。その女性の外見からするとハーフだと思ったのだが、実  
際にはハーフではなく、佐賀生まれの佐賀育ちとのことだった。それを聞いて私は驚いたが、西日  
本で育ったことは私も共通であるから、そこから話が盛り上がったのを覚えている。

明日はアテネ旅行の前日となるが、昼前から昼過ぎにかけて、1件ほどオンラインミーティングがあ  
る。そこでは座談会形式で様々な業界の方々と話をさせていただくことになっており、今からどのよ  
うな対話がそこでなされるのかすごく楽しみである。ちょうど本日、ある協働者の方に今道友信先生  
の動画がインターネット上に存在していることを教えていただき、先ほどその動画を見ていた。する  
とその中でも、哲学の探究において対話がどれほど大事にされていたのかが説明されていた。端

---

的には、対話は哲学の命なのだ。それを聞き、これからもより一層、様々な方々との対話を大切にしたいと思った次第である。

それでは今からもう1曲ほど曲を作り、その後、必要なメールに対して返信を行いたい。明日もまた充実した形で1日を過ごすことができるだろう。そしてその充実感は明後日から始まるアテネ旅行を充実したものに導いてくれるだろう。フローニンゲン:2020/7/21(火)19:44

### 6035. 言語阿頼耶識と創造性について

—創造性とは、時代の要請とカルマの中に自己を投じ、自己のカルマを重ね合わせていくことである—ベルナード・リーヴァフッド

時刻は午前7時を迎えようとしている。早いもので、今日からは週の折り返しとなり、いよいよ明日からはアテネ旅行が始まる。

今日は昼前から昼過ぎにかけてオンラインミーティングがあり、そのミーティングを終えたら、夕方からアテネ旅行の準備をしようと思う。主な準備としては、部屋の掃除に始まり、アテネの空港からホテルまでの道筋の確認、そして荷造りとなる。余力があれば今日中に、滞在期間において大方いづどこに足を運ぶのかをリスト化しておきたいと思う。行きたい場所の目処は立っているが、それをいづどのよう巡っていくかに関してはまだ計画をしていないのだ。今回は8泊9日とかなりゆとりのある滞在のため、アテネをくまなく回れるだろう。そうしたゆとりがあるおかげで、滞在中に色々と計画を柔軟に変更することも可能かと思う。

昨日、言語と無意識の関係について考えていた。仏教の無意識論においては、無意識の中に言語阿頼耶識というものが想定されており、そこは言語の生成を司る。昨日はその無意識の層に自覚的になってみたところ、そこから自ずと言葉が立ち現れてきていることを改めて実感した。

何かを考えるという行為に先立ってそこから言葉が生まれてくるかのような感覚があった。意識と無意識の研究において、私たちが何かを意識するよりも先に無意識が起動しているというのはよく知られていることだが、まさに言葉を発しようとする意識に先立って言語阿頼耶識が起動していることを改めて観察した。そこからふと沈黙についても考えていた。沈黙においては、言語阿頼耶識の活

---

動が一旦落ち着き、そこから何かを考えて言葉を生み出すというよりも、再度言語阿頼耶識の方から言葉が立ち現れるのを待ち、その言葉を紡ぎ出すということが沈黙を通じた真の言葉の発し方なのかもしれない。

昨日はその他にも、創造性について考えていた。創造神の息吹を自分の内側の中に取り入れ、その感応から形になって現れて来ようとするものが「インスピレーション」の語源である。いつも私は、創造神の息吹を自分の内側に取り入れていたのだ。そしてそれが靈感になり、それがあのおかげで自分の日々の創造活動が成り立っていることに気づく。創造の息吹を与えてくれている存在への感謝の念が尽きない。

先日、シュタイナーの思想を長らく探究しているある方から、オランダ人の人智学者ベルナード・リーヴァフッドの仕事を紹介してもらった。リーヴァフッドが「創造性とは、時代の要請とカルマの中に自己を投じ、自己のカルマを重ね合わせていくことである」と述べているように、創造性を育み、発揮していくというのは、自分が生きる同時代と向き合い、同時代の課題と自らのカルマ的使命に自己を投げ入れていくことが不可欠なのだということを改めて思う。真の創造性とは、自己の深い部分に根差したものであるだけでなく、社会と同時代の深い部分にも根差したもののなのだ。フローニンゲン:2020/7/22(水)07:11

### 6036. 今朝方の夢

今、小鳥たちが早朝の歌を楽しげに奏でている。今日の彼らの歌は、いつも以上に喜びで満ち溢れているように聞こえる。風がほとんどなく、とても落ち着いた世界の中に、天空からは優しい朝日が降り注いでいる。確かにこうした世界の中にいれば、自ずから喜びの歌を口ずさむだろう。小鳥たちの気持ちがよく分かる。そして、彼らの気持ちが分かった瞬間において、自分も同じ気持ちであることが興味深い。ここに真の共感の1つの姿がある。

今朝方も印象的な夢を見ていた。それについて書き留め、本日の取り組みを開始していこう。確かに今日はアテネ旅行に向けた準備があるが、ロイ・バスカーの書籍の続きを読み進めていきたいと思う。夢の中で私は、学校の教室の中にいた。その教室は見慣れないものだったが、馴染みが全くないかというところではなく、むしろそこにいることには心地良さがあつた。

---

教室には生徒がそれほどいなかったのだが、その場にいた生徒たちはみんな席につき、各々の関心に応じた勉強をしていた。私も1人の生徒だったが、先生役を務めることをある先生から任されていて、教室の前に立って、クラス全体を眺め、困っている生徒がいないかを観察していた。

すると、私から見て一番左の列の一番前に座っていた女子生徒が困っているような表情を浮かべていた。彼女(ET)は、同じ小中学校に通っていたこともあり、話しかけることに何の抵抗もなかったもので、どうしたのかと尋ねてみたところ、国語の問題で詰まっているとのことだった。彼女のノートを見ると、よく考えながらノートが取られていることがわかり、それはとても素晴らしいことだと思った。彼女が頭を抱えている問題を見て、その問題の解決に向けたヒントを私は出した。

すると、彼女は綺麗にまとめられたノートを参照しながら、その問題の解決に向けて鉛筆を動かし始めた。そこから彼女は、順調に問題を解き始めた。ふと彼女の横を見ると、そこには小中学校時代の双子の友人の弟(TF)が座っていた。彼は数学の問題に頭を抱えているようであり、見ると、隣の彼女のように綺麗にノートを取っているのではなく、紙切れの裏に数学の問題を細かな字で解こうとしており、その字が雑なこともあって、それが計算間違いなどを生んでいるようだった。そこで私は、彼に新しいノートに問題を解き直すことを提案した。彼は最初、その新しいノートはもっと別のタイミングで使い始めたいと考えていたようだが、私の勧めもあり、新しいノートを開き、もっと大きく読みやすい字で問題を改めて解き始めた。

すると突然、私の体は別の場所に瞬間移動した。今までいた学校と感覚的に場所は近いのだが、今度は大きなショッピングモールの中にいた。時刻はちょうど昼時だったので、数名の友人と上層階のレストランに行こうと思った。その前に私たちは一旦トイレに行くことにした。

トイレに到着し、用を足そうとすると、どういうわけか友人の1人が笑いながら、私が使っている便器に向かって横から用を足し始めた。私はそれが嫌だったので、その隣の便器に用を足すようにした。無事に用を足した後、手を洗ってからトイレの外に出て、エレベーターの前に向かった。どうやら中層階までのエレベーターと上層階まで行けるエレベーターの2つがあるようであり、私たちは間違えないように上層階行きのエレベーターに乗ろうとした。すると、そこでもまた瞬間移動が起きた。今度は、今レストランに向かおうとしていた友人と、先ほど教室にいた女子生徒と一緒に小さな飛行機の中にいた。その飛行機は、ちょうどどこかから飛行場に戻ってきたところであり、滑走路をゆっく

---

りと動いていた。その女子生徒曰く、何やらある悪い組織から追われているとのことであり、私たちは彼女を守ることにした。すでに追手が空港に侵入しているとのことであり、私たちは彼女をどのように逃すかを考え始めた。

ちょうど私が所有していたヘリコプターが飛行場の中に置かれていて、2人の友人と私がそれに乗って空を飛び、おとりになることによって、そのすきに彼女に飛行場から離れてもらおうと思った。そのヘリコプターは3人乗りのものであり、小型だった。ライセンスに関しても比較的取得しやすかったということを友人たちに話しながら、私たちは早速おとりとして空を飛び始めた。

そこから彼女がどのように逃げたのかは不明だったが、彼女は無事であるという確かな感覚があった。ヘリコプターで飛び立った私たちは、東京方面に向かって行った。万が一ヘリコプターが墜落した場合には、ある程度の高度からライフジャケットを着て飛び降り、一般用の野球場に張られたネットなどをクッションにして地面に降りることを私は勧めた。彼女を追っていた人物たちが私たちを追っている様子もなく、それでいて彼女も無事だという直感があったので、そこからは友人たちと和気藹々と話しながら空の旅を楽しんでいた。フローニンゲン:2020/7/22(水)07:43

#### 6037. 人間中心的な発想の誤謬:生命尊重の精神に根付いた時空間倫理

時刻は午後8時を迎えた。つい先ほど、部屋の掃除を終えた。明日は午前6時半過ぎの列車に乗ってスキポール空港に向かうため、今夜はいつもより早く就寝しようと思う。この日記を書き終えたらゴミを捨てに行き、荷造りをサッと済ませて就寝に向けて準備を始める。

夕方にフライトのチェックインを終え、ボーディングパスを入手した。現在、ギリシャ政府は入国者に対して、ギリシャでの滞在先や緊急連絡先だけではなく、コロナに関する情報を事前に登録することを要求している。チェックインの際にそれを知り、速やかにその登録を済ませた。ギリシャは感染者数も落ち着いているのだが、それでも他の国と同様に、未だ諸々の警戒対策がなされていることは確かである。

今日はその他にも夕方に、アテネで足を運びたい博物館・美術館、そして古代遺跡をリストアップしていった。それら全てに足を運ぶか分からないが、博物館・美術館に関しては合計8つ、古代遺跡に関してはとりあえず11個ほどリストアップした。博物館・美術館の中には小さなものが含まれている

---



---

し、古代遺跡に関しても隣接した場所にあるものもあり、それらの個数ほどに多い印象を与えない。明日は午後6時過ぎにホテルに到着する予定であり、明日はホテルの近隣を散策するぐらいにとどめ、明後日から本格的にアテネ観光を始めようと思う。

今回は8泊9日かの旅であるから、中休みを入れる余裕もあり、ホテルでゆっくりする日があってもいいかと思う。しかしそうした日にも、1日中ホテルにいるというのではもったいないから、古代遺跡を散策することを兼ねて、アテネ市内の散歩を楽しみたいと思う。

今日は昼から昼過ぎにかけて、先日の中土井遼さんとの対談のフォローアップを兼ねた対談を再度中土井さんとさせていただいた。今日の対談でも色々と考えさせられることがあった。本日の対談で話題に挙げたわけではないが、私たちは現代が直面する問題に対して、人間中心的な問題の定義や問題解決をしようとしてはいないだろうか？という問いが立ち上がった。全てを人間中心で考えてしまうこともまた、私たちの認識的な誤謬の1つであり、この認識的な誤謬は現代の病の1つであるように思える。

問題の定義や解決策の立案に関して、果たしてそこにどれだけ他の生命や地球という惑星に対する視点があるだろうか。世間でなされている議論を見ていると、確かにそこには人間への視点はあるのだが――それすらもない場合もあるが――、逆に言えば人間にしか視点が当てられていないという実に狭く、実に次元の低い議論に頻繁に出くわす。

その他にも、改めて時間の貴重さについて考えていた。このところは倫理学への関心が高まり、例えば私たちは一体どれほど自分の生命時間や他者の生命時間に対して配慮をしているだろうか。SNSをはじめとして、その使い方を少し誤れば、私たちの貴重な生命時間を奪いかねないものが社会に溢れている。こうしたテクノロジーやサービスの存在だけではなく、他者の生命時間を奪う行為に対して、どれほどの倫理観が発揮されているだろうか。それは「時間倫理」とでも呼べるものになるだろうか。

時間倫理があれば、当然ながら「空間倫理」というものを想定することができ、それは他者の物理的な空間に対して発揮される倫理観であるだけではなく、精神的な目には見えない空間に対して発揮される倫理観でもある。現代社会において、人間の尊厳に関わる個人個人の生命的時空間に対

---

する配慮が希薄になっているのではないかという危惧がある。そうした点において、生命尊重の精神に根付いた時空間倫理とは何かを考えていくことは1つ大切なことではないかと思う。フローニンゲン:2020/7/22(水)20:19

### 6038. 【アテネ旅行記】アテネ旅行の出発の朝に：今朝方の夢

時刻は午前5時を迎えた。今朝は4時半に起床し、シャワーを浴びて、身支度を整えた。いよいよ今日からアテネ旅行が始まる。

この時間帯はまだ辺りは薄暗く、少しずつ空がダークブルーに変わり始めているところである。フローニンゲンの自宅を出発するのは午前6時過ぎであり、その頃には随分と明るくなっているだろう。幸いにも今日のフローニンゲンは天気が良く、駅までの道を歩くことは心地良いに違いない。今小鳥たちが鳴き声を上げているように、その時間帯にも小鳥たちが鳴いていて、彼らの声を静かな心で聞きながら駅に向かうことができるだろう。

天気予報を確認すると、フローニンゲンは明日から天気が崩れる。気温は引き続き低いままなのだが、1日のどこかの時間に必ず雨が降るような天気が続く。一方で、アテネは信じられないほどの好天気が続く。雲1つない快晴マークが連日続いており、旅の最初から最後まで、ずっと快晴のようで何よりだ。気温に関しては軒並み高く、最高気温は33度から35度の範囲に収まっており、最低気温は23度から25度の範囲に収まっている。このような気温の夏をもう4年以上体験したことがないので、久しぶりに夏らしさを満喫できそうで非常に楽しみだ。気候への適応に関しては、さほど問題がないように思われるが、あまり油断しないようにしたい。

旅に向けた出発の日の朝も夢を見ていた。今朝は朝にシャワーを浴びてしまったこともあり、夢の記憶がほとんどなくなってしまっている。いつもであれば起床してすぐに夢を書き留めているのだが、今朝はそれを怠ってしまったことも理由だろう。

かろうじて覚えていることがあるとすれば、夢の中に中学校時代の音楽の先生が出てきたことである。その場はパーティー会場か何かであり、立食形式の夕食会が行われていた。そこで私は中学校時代の友人たちと夕食を食べながら楽しく話をしていて、そこに先生が加わってきた。

---

最初私たちは、先生たちを歓迎し、先生を含めて楽しく話をしながら過ごしていたのだが、何かをきっかけにして事態が急変した。先生が牛肉を取ろうとするときに、どういうわけか私には憤怒の感情があった。先生が牛肉を取ろうとしたことに対して憤りを感じていたわけではなく、その前に先生が言ったことに対してであった。そこで私は、先生の皿に牛肉をどっさり乗せて、何か一言述べた。その時に、先生の下腹部を思いっきり殴ってやろうかと思ったが、それはやめた。しかしその瞬間に目覚め、ベッドの上のクッションを思いっきり殴っている自分がいた。今朝方の夢について覚えているのはそれくらいだろうか。アテネ旅行の出発の朝にこうした攻撃的な夢を見るとは思いもしないことであった。その他に何か思い出せることはないかと、今心を静かにして想起しようとしている。あと1時間弱で自宅を出発し、フローニンゲンの駅に向かう最中にも夢について思い返してみようかと思う。

駅に到着したらすぐさまチケットを購入し、すでに到着しているであろう列車に早々と乗り込み、ここでは日記を執筆したり、作曲をしたりしようと思う。それに加え、今回の旅からはiPad Proを持参することができるので、絵も描く楽しみがある。とても贅沢で充実した旅になりそうだ。フローニンゲン：

2020/7/23(木)05:24

### 6039.【アテネ旅行記】スキポール空港に向かう列車の中で

つい先ほど、スキポール空港行きの列車に乗った。列車は間も無く出発する。フローニンゲンの中央駅に来たのは6ヶ月ぶりであり、駅の雰囲気随分と変わっていることに驚いた。歴史ある駅舎や、駅前のモニュメントはそのままだったが、列車が到着する乗り場の雰囲気が変わっていたり、これまであった店がなくなっていたり、逆に新しい店ができていたりした。コロナの影響を受けて撤退を余儀なくされた店もあったのだろうし、逆にこの機会に出店した店もあったのだろう。

駅に来たことが半年振りだったということは、この半年間、私はフローニンゲンから外に出なかったことを意味している。確かにこの半年間は、街の中心部のオーガニックスーパーに行くか、かかりつけの美容師のところに行くか、近所のスーパーに行くことしかしていなかったように思う。そうしたこともあり、今回アテネに行くことは自分にとって本当に新鮮なことのように感じられるだろう。

---

たった今、列車がスキポール空港に向けて出発した。確かに時刻は7時前であるから少し早いのだが、いつもの旅の時よりも乗客は少ない。そして事前情報にあったように、乗客はみんなマスクを付けている。もちろん、私も今マスクを付けている。マスクを付けるのも本当に久しぶりのことであり、最初は少し慣れないかもしれない。実際に、メガネがすぐに曇ってしまうことには手こずり、マスクの位置をうまく調節すればそれを防げることに気づいた。確かティッシュなどをマスクに挟めば曇りを防止することができるので以前聞いたことがあり、それを試してもいいかもしれない。今は幸いにもそれを試さなくてもなんとかメガネが曇らずに済んでいる。

フローニンゲンを出発した列車からの風景はとても長閑である。ちょうど今、牧場の横を通過しており、牛や馬の姿が見える。彼らは朝食として牧草を食べている。

ここから空港までは約2時間ほどの列車の旅となる。スキポール空港に到着するのは9時前であり、フライトの時間は12時、ボーディングが始まるのは11時20分だ。空港に到着したら速やかにセキュリティーチェックを抜けて、いつものようにラウンジで寛ぎたい。今回のコロナを受けて、飲み物や食べ物セルフではなく、注文式になったようなので、サラダとエスプレッソでも注文したいと思う。

それでは今から作曲実践を少々行い、その後、持参したロイ・バスカーの思想の解説書を読みたいと思う。創作と読書と共にある旅。こうした旅を通じて、また自己が少しばかり深まりを見せ、人生がより充実したものになるだろうか。スキポール空港に向かう列車の中:2020/7/23(木)06:58

#### 6040.【アテネ旅行記】スキポール空港の様子

時刻は午前9時半を迎えた。予定通り、9時前にスキポール空港に到着した。空港の現在の稼働状況を確認することは、1つの確認ポイントとして設けていたことであり、空港に到着してすぐに気づいたが、空港を利用している人はやはりまだ少なかった。空港内を行き交う人たちの大半はマスクを付けており、チェックインカウンターの付近では「マスク着用」の立て看板が立てられていた。

空港内の店も閑散としていて、全体として空港の利用率は平常時と比べて35%ほどであった。人が少ない分、空港内の移動は速やかであり、セキュリティーチェックは全く並ぶことなく、すぐに通過できた。今回、初めてiPad Proを旅に持って来たこともあり、パソコンはカバンから出していたのだが、

---

iPad Proをカバンの外に出すことを忘れていて、それが引っかかってチェックを受けた。だがそれもすぐに終わり、結果として数分以内にセキュリティーチェックを通り抜けることができた。

そこからは空港ラウンジに向かった。いつものようにAspireラウンジに到着し、受付でプライオリティーパスとボーディングパスを提示したところ、プライオリティーパスがカードリーダーに通らなかったようだった。おかしいなと思っていたところ、受付の方から、「申し訳ありませんが、期限が切れていますね」と言われた。そんなはずはないと思って確認したところ、なんと今年の3月末に期限が切れているようだった。半年前の旅行の際にプライオリティーパスにはお世話になっており、たっぷり期限は今年の年末までだと思い込んでいたようだった。

ラウンジでは飲み食いが自由にできるだけではなく、今このようにしてパソコンを広げて日記を書くこともできるし、作曲実践もできる。何より、半個室スペースのような場所で静かにフライトまでの時間を過ごせることがとても快適のため、今回はプライオリティーパスを使うのではなく、ラウンジ使用料をそのまま支払うことにした。飲み食いを自由にできる点と、2時間強の時間を静かな環境で過ごせることを考えると、ラウンジ使用料は安いものである。

ラウンジに入って早速席を確保し、ダブルエスプレッソを取りに行った。事前情報と異なり、セルフサービスで飲み物や食べ物を取れるようになっていたことは有り難い。ただし食べ物に関しては種類が減っていて、以前のように食べ物が空気に晒される形で置かれているのではなく、小さな皿に取り分けられていて、全てにサランラップが覆いかぶされていた。

それでは今から作曲実践をし、時間があれば絵を描きたい。スキポール空港までの列車の中では、4曲ほど短い曲を作り、ロイ・バスカーの思想体系をわかりやすく解説した“The Order of Natural Necessity: A Kind of Introduction to Critical Realism”を読み進めることができた。飛行機の中では作曲ノートを広げるスペースがあまりないであろうから、ラウンジでは作曲と絵を描くことに専念し、フライトの中で読書を進めていきたいと思う。

アテネ旅行を終える日にアテネの空港でもラウンジを利用しようと思っていたが、プライオリティーパスが活用できないので、そこでも再度ラウンジ使用料を払おうと思う。アテネからフローニンゲンに戻って来たら、プライオリティーパスの更新を忘れずに行い、実家宛にそれを送ってもらう。母に連



---

絡をし、それをフローニンゲンの自宅に送ってもらうようお願いしよう。そうすれば、秋の日本への一時帰国の際には、いつものようにプライオリティーパスを使ってラウンジが利用できるだろう。

Aspireラウンジ@スキポール空港:2020/7/23(木)09:55